

(第 17 回 : 2020 年 11 月)

アラスカ ～The Last Frontier～ (その 3)

暗く寒いアンカレッジの長い冬をいかにして乗り切るかというのは、当時独身だった筆者にとっては、大げさでなく重大な課題でした。

アンカレッジでの日々

アンカレッジでは一度引っ越しを経験していますが、最初の住居は前任者が住んでいた木造（北米で一般的なツーバイフォー工法）のアパートを引き継ぎました。アンカレッジでは、一軒家だけでなくアパート等の集合住宅も含め一般の住居はほとんどが木造で、鉄筋コンクリートの建物は公共施設やホテル、オフィスビル、ショッピングモールなどに限られていました。住居が木造なのは、8 ヶ月もの長い冬のことを考えて暖房効率がいい木造家屋が選ばれたこともあるでしょうし

（鉄筋コンクリートの建物は、寒冷地ではコンクリートが極端に冷えるため暖房効率が良くありません）、木材資源が豊富にあったことなどが、おそらくその理由ではなかったかと思います。アパートの屋外駐車場には電気のコンセントが備え付けられており、車のエンジンルームから伸びている電気のコードをプラグインしてエンジンを一定温度に温めておく装置がありました。これは、冬場の寒さでエンジンが冷えて始動しなくなることを防ぐためのもので、アパートの室内には外のコンセントから繋がっているスイッチがあり、帰宅して駐車をするとき車のコードをプラグインして室内のスイッチをオンにすることが日課となっていました。この作業を怠ると、年式の古い車はエンジンがかからなくなることがしばしば起こりました。新車を所有していた筆者は、そのような状態に陥った車から求められて、相手の車と自車のバッテリーをケーブルで繋いで助けたことが何度もありました。アパートは、日本のような部屋ごとの個別暖房ではなく建物全体でセントラルヒーティングになっていたため、室内では半袖、短パンで過ごすことができ快適でした。最初の住居は、総領事館から 7～800 メートルの距離にありましたが、冬場の -20℃前後の中でこの距離を歩くことは実際問題として不可能に近いことでしたので、このような短い距離でも車で通勤していました。2 度目の住居は、職住接近を避けて空港近くの郊外アパートに移りました。住居数 100 戸ほどの大規模 3 階建てアパートでしたが、これも木造住宅で屋外駐車でした。

1 年半弱の在勤中、旅行らしいことは全くしておらず、専らアンカレッジで日常を過ごしていました。館員が僅か 4 人の公館でしたので、仕事も担当 1 つというわけにはいかず、総務、経理、領事、通信の業務で忙殺され、さらに皇族の外国御訪問、総理、閣僚等の外遊でアンカレッジを経由する際には週末、昼夜を問わず空港でのアテンド業務があり、まとまった休みを取ることが難しかったということも言い訳としてはありますが、長い冬場の寒さと暗さで旅行に出かけるのが億劫に

なって家に籠っていたというのが正直なところですが、それでも、多少なりとも気候がマイルドになる春先から夏場にかけては、週末を利用して近場へ出かけることもありました。なにしろ、車で20分も走れば周りには大自然でしたので、近場で楽しめるポータージ氷河と周辺の見物、春にはアリエスカ・スキー場でのスキーも経験しました。また、市内の氷結した湖では氷に穴をあけてワカサギの一種であるスメルトを釣るアイス・フィッシングなどにも何回か出かけたものです。アイス・フィッシングでは、厚さ1メートル以上もある氷に穴を開けるのに1時間ぐらいかかりますが、必ずしも開けた穴の周辺に魚がいるとは限らず、そこで魚がかからなければまた別の穴を開けるといった具合で、労力の割には釣果も保証されない効率の悪い魚釣りでした。

また、アラスカのアクティビティとして夏場のサーモン・フィッシングを外すことはできません。6月から7月にかけて、鮭が産卵のために海から川に遡上してくる時期に釣りが解禁となります。釣りには、シーズン中有効なフィッシング・ライセンスを購入する必要がありますが、1日の漁獲も資源保護のために個人では3匹までというルールが決められていました（今は、個体数の回復に伴い6匹に増えたとのことですが…）。釣り場は主にキーナイ半島で、アンカレッジから車で4時間ほどにあるニルチックでのキングサーモン、ロシアンリバーでのレッドサーモン釣りがポピュラーなところでした。夜9時過ぎにアンカレッジを出発して釣り場到着は午前1時か2時ごろですが、夏場ですので外は一晩中明るく、深夜過ぎに明るい中で釣りをするという不思議な光景でした。筆者は、魚とはあまり縁がなかったのでしょうか、何回も出かけましたが釣果は上がりず、釣り上げたのは生涯で僅かにレッドサーモン2匹のみ。それでも、ロシアンリバーに遡上するレッドサーモンの大群は川面をびっしりと埋め尽くすほどで、壮観なことと云ったらありませんでした。6月末ハイシーズンのロシアンリバーには、川の両サイドに1メートルほどの間隔で釣り人が並び、あちこちから"Fish on"（魚が針に掛かると釣り人は合図を出し、周りの釣り人は釣り上がるまでスペースを空けてやるのがマナー）の音が聞こえてきたものでした。ちなみに、釣りは疑似餌を用いたルアーフィッシング、サーモンの大群の中にルアーを投げ入れますので魚の当たりはよくありますが、釣り上げることができるのは針がくちばしにかかった時のみで、背びれや胴体などにかかった場合にはキャッチ・アンド・リリースというのがルールでした。

前回コラムでも書いたとおり、アンカレッジには陸軍、空軍の基地があり、それぞれの基地に付属のゴルフ場がありました。一般にも開放されていたので、短い夏に白夜のゴルフを楽しみました。特に、陸軍のゴルフ場名は「Moose Run Golf Course」といって、その名のとおりプレー中にムース（世界最大のシカで和名ヘラジカ）がコースに現れることがよくありました。ムースに遭遇した時ばかりは、そのあまりにも巨大な体躯に、誤ってムースにボールを当ててしまっただけで大変と、プレーどころではありません、ドキドキものでした。ちなみに、アラスカでは夜間のドライブ中に道路に飛び出したムースやクマに衝突する事故がよくあり、アンカレッジ郊外の道路にはムースに注意の標識があちらこちらに立てられ、ドライバーの注意を喚起していました。

アラスカといえばオーロラが有名です。最近では、日本からも鑑賞ツアーが組まれているようで、ハイシーズンには内陸部にある州内第2の都市フェアバンクス周辺にオーロラ鑑賞目的の旅行者が集結していると聞きますが、当時はアンカレッジ市内でも居ながらにしてオーロラを見ることができたのはラッキーでした。いつオーロラが出るかというのは前もってわかるわけではないのですが、概ね10月から11月にかけて空が晴れている日の深夜に何度か見たように記憶しています。

10月といえば気温はすでに零下、深夜に近い時刻に外にいるのはレストランなどで遅い夕食をとった後や、知人宅で遅くまで室内遊戯に興じた後などで、戸外の駐車場に戻ってオーロラに気づくことが多かったと思います。オーロラが出ているのがわかると、鑑賞に適した街灯光のない近場の森に車で移動して眺めたものでした。オーロラ鑑賞には、周囲に余計な光がないことが肝心です。よく目にしたのは、オレンジ色や赤みがかかった黄色に見えるオーロラでしたが、まれに緑色の光を放つオーロラに出くわすこともあり、夜空一面を覆いつくす緑のカーテンが揺らめきながら前後左右に移動していく様は、それは幻想的で、(寒さと森の暗闇の不気味なことさえ我慢できれば)1時間や2時間見ている見飽きることはありませんでした。

マッキンリー

マッキンリー(現在名デナリ)は、標高6,190メートルと北米大陸の最高峰です。マッキンリーの呼称は、1800年代末の第25代大統領ウィリアム・マッキンリーにちなんだものですが、マッキンリーを含む周辺は1980年にデナリ国立公園となり、その後2015年にはマッキンリー山の名称そのものも先住民の呼び名であるデナリ(「大いなる山」の意)に改称されています。この国立公園は、雄大な自然が素晴らしく、夏場は米国本土や海外から大勢の観光客が訪れます。筆者は、着任翌年の夏、現地に永住して長い日本人の知人からトレッキングに誘われたこともありますが、タイミングが合わずじまいで訪問することはできませんでした。今から思い返すと貴重な機会を逃したことが残念です。

マッキンリーは、世界5大陸最高峰の一つとして登山者の目標とする山ですが、夏場のマッキンリー登山は5月から7月ごろがピークで、多くの登山者がマッキンリーを目指してアラスカを訪れていました。日本人登山者も多く訪れていましたが、遭難者も何年か続けて発生していました。筆者は夏場のピーク時を1シーズンしか経験しませんでした。1982年7月にも2名の遭難者があって1名が亡くなり、日本から駆け付けたご家族の支援を行ったと記憶しています。この時は、日本人登山者が国立公園当局に登山計画を出していなかったことが問題となりかけました。この年は、日本人登山者以外にも何件か外国人の遭難事故が立て続けに起きました。マッキンリーのような著名な山の登頂成功は人々に感動を与えますが、一方で遭難となれば州政府がレンジャー部隊を派遣してヘリを飛ばすなど、捜索救出活動には危険を伴うとともに莫大な経費もかかります。当時、一部の現地新聞では、遭難した外国人登山者の捜索に50万ドルもの経費を要するとして、登山計画が提出されないことなどについての批判と遭難者捜索への公費投入について問題を提起する論調も見られましたが、現地の感情としてはありうることでしょう。それよりも、筆者としては日本人遭難者の家族への対応、特に対面して状況説明をすることは、20代半ばを過ぎたばかりで経験も浅かった身としては、仕事とはいえ荷が重く、その難しさ、家族感情を考えた時のやりきれなさを痛感したことが思い出されます。

最後に：アラスカ物語

これで、今回のコラムを閉じようと思っておりましたが、ここまで書いたところで新田次郎著作の

小説「アラスカ物語」のことを、ふと思い出しました。アンカレッジへの転勤が決まり、少しでも予備知識を仕入れておこうと考えて、日本から取り寄せた本でしたが、当時は、少しでも読み進めたものの忙しさにかまけて途中で放置、そのままになってしまいました。物語は、明治時代半ばに東北の宮城県からアメリカに渡った後、アラスカにたどり着いてエスキモーの女性と結婚した日本人フランク安田の半生を描いた史実に基づく小説で、主人公が飢餓に苦しんでいた現地の海岸エスキモーのために内陸部に新天地を開拓したことで知られています。先日、自宅の本棚に埃をかぶっていた古びた文庫本を探し出し、あらためて読み返してみました。小説は、エスキモーの集落再生に賭けたフランク安田の献身的な生きざまがテーマですが、作者である新田次郎氏の綿密な取材に基づく克明な情景描写と、自然の過酷さに果敢に挑んだ登場人物の様子がつぶさに描かれています。内容は開拓時代の話ですので、開発が進んだ現在のアラスカとはもちろん異なります。また、筆者自身アンカレッジ以外に訪問したことのある土地といえば、出張で訪問した州都ジュノーとアラスカパルプのあったシトカだけで、内陸部に足を踏み入れたことがありませんので、あまり知ったふうなことは言えませんが、それでも、描かれている季節の変遷の様子や自然の情景は、時を超えて筆者が在勤していた1981年ごろと重ね合わせても違和感がありません。むしろ、想像力を膨らませてくれます。アラスカの自然や極寒の冬の過酷さを知るには格好の1冊ではないかと思えます。

おわり

(公財) 栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人 (略歴)

1977年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国(英国)大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の9公館で計29年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に2019年3月退官。同年5月より現職。